

書評

日本の水害

小出 博編

東洋経済新報社

祖国の山に
草木が青々と茂り
祖国の川が
清らかに流れ
日本人のいとなみが
平和にさかえるように
心から祈る

この祈りの言葉にこの本は初まる。近年の相次ぐ水害はジャーナリズムの上でも大きく取上げられているが、この本のように、広く深く、しかもわかり易く水害の実体を説いているものは少ない。筆者は言う、水害は、川と沖積平野とを結ぶところに現われる社会史の一断面である。そこから来る水害防禦の技術は、社会から切り離して見ることはできもしないし、そうしたのでは技術だけが浮上ったものになってしまう。総合科学としての水害科学の確立を筆者は声を大にして叫ぶ（これは災害科学全般についていえることである）。なぜ確立しなければならないか、それを説くためにこの本全体がその基礎資料を提供する。正直な所、私はこの本によって初めて水害の本体に対する眼を開くことを得た。気象台では各河川の洪水予報を担当しているが、洪水予報をどんな方法で出すにしろ、この本に説かれている事を基礎知識として持つということは是非必要であると思う。たゞいわずもがなではあるが殊更に欠陥をほじくれば、われわれの知っている地点雨量の欠点を筆者があまり重視していないということである。すなわち、どの地域にどの位の雨が降ったかは現在の観測網では不完全にしか与えられない。前もって何ミリ降るかを予報することはもちろん大切であるが、現在何ミリ降っているかを知ること、水害を軽減するのに重要な役割りを果たす。我田引水的であるかも知れないが、元となる雨量の適確な把握と、その雨量が降

った時に筆者の水害諸因子との関係がどのようになるかを取扱わなければ、水害対策は不完全なものとなるだろう。水害科学確立に寄与する雨量観測資料はあまりにも少ないし、この点は気象家の解決すべき分野でもある。

“水害問題の解決は、水害防禦担当の科学技術者と社会経済方面の専門と、そしてさらに重要なことは、水害地の居住者との緊密な協力なしには不可能である”これは巻末の言葉であるが、すべての災害問題について同様のことが言えるはずである。

従来の水害技術及び学説に対して、キタンのない批判を、実例を提示しながら具体的に加え、資本主義社会の下に歪曲されて来た技術を正しい姿のものにしようとする筆者らの努力に敬意を表するものである。

277頁で360円は決して安くはないが、一冊買っておけば水害関係の座右の本となることうけあいである。

(奥田 穰)

雪氷の研究 No. 2

B5 246頁 450円

日本雪氷協会

融雪と積雪調査を主とした雪氷の研究 No.2 が出た。近年実用上の必要から各地でスノーサーヴェーが行われているが、全般的に概観した出版物がなかった。内容は積雪含水量、融雪、積雪調査の三つに分けられ、それぞれ5編、8編、9編の論文及び報文からなっている。全体に目をとおせば、この方面の第一線の研究や調査の現状が簡便にはっきりつかめてきわめて便利である。積雪の含水量測定では手廻し遠心分離器が活用されていて、黒田・古川氏、四手井氏、大浦氏の5つの型が行われている。四手井氏や大浦氏の方法は精度も高く興味深いものがある。広く実用に供するには、普偏性をもたなければならないから、精度をある程度ぎせいにし普及を主眼とし、広範な資料を集めたいものである。融雪はきわめて複雑な現象で、

その機構の全体を正確に概観するのは至難な事であろう。ここでは融雪の機構、散土融雪、融雪曲線輻射融雪、融雪予報等がのべられている。

実用上は散土融雪や、融雪予報が大きな役目をするであろう。正確な融雪予報はどれだけ役に立つかについては電力、土木等の立場からいろいろな意見や希望があることであろう。積雪調査は近年華々しくしかも広範囲にわたって実施されているところであるが、実行上の困難や方法の多様性に当面している人にとっても本書のようにまとめられてあると、何かにつけて便利である。大沼匡之氏のアイソトープによる積雪量測定の論文は今後このような方法によって実用化されるであろうと考えられるだけに、その先駆をなすものとして注目される。石原健二氏と福井篤氏の労になる“日本における雪量調査事例”は1948年の北海道忠別川流域調査から、1954年の各地の調査まで84例を、各例について1) 調査地域、2) 調査時期、3) 調査担当者又は機関、4) 調査班の編成、5) 調査の主な目的、6) 調査用具その他の装備、7) 調査の内容、8) 調査整理の概要、9) 調査結果の概要、10) 調査結果の発表と10項目にわけ簡潔に示してある。見ようによってはわずか数年の間によくもこれだけの調査を行ったものと見られるし、他方まだ全然調査の行われていない地域もかなり広いのに気がつく。この方面の実用調査がようやくその緒についたところで、これから基礎固めがなされるのであろう。本書でところどころ目につく用語の不統一などはこれからの問題として許されてよいところといえよう。以上のような内容であるからこの方面の程度の高い、簡潔なハンドブックとして、またさらに進んだ研究や調査への基盤として広く用いられるよう願いたい。なお本書の編集事務に直接あたられた四手井綱英博士の御苦心に深く敬意を表したい。

(伊東 亘自)